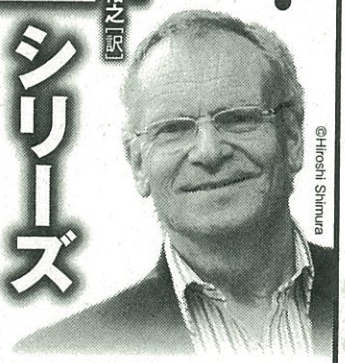
山本一力 作家
70歳を過ぎて、今までで一番面白い作品を読ませてくれるとは！脱帽の一言。

今、世界が熱狂！
全世界で300万部突破!!
ジェフリー・アーチャー 戸田裕之[訳]
「クリフトン」シリーズ


©Hiroshi Shimura

第1部『時のみぞ知る(上・下)』上670円 下630円
第2部『死もまた我等なり(上・下)』各630円
第3部『裁きの鐘は(上・下)』上710円 下630円

新潮文庫
http://shinchosha.co.jp/bunko
◉表示の価格には消費税が含まれておりません。

とても1人で街を歩ける状態ではなくなりますから、結局、感染源となる可能性のある患者と病院外で接する機会は、日本ではまず考えられません」（前出の外岡氏）

ちなみに、人間の体外に出たウイルスは数時間で死滅するという。

こうして見ると、さほど神経質になる必要はないようにも思えるが、感染症学が専門の中原英臣・新渡戸文化短期大学学長は警戒を緩めていない。

「76年以来、エボラ熱は何度か流行しましたが、いずれも死者は数百人で済んでいました。ところが、今回は既に5000人規模になっている。ウイルスに何らかの変異、強毒化が起きている疑いもあります」

「公衆トイレは使わない」

そこで、やはり気になるのはエボラウイルスへの対峙方法。元東京都感染症医療対策アドバイザーで「新ゆり内科」院長の高橋央（ひろし）氏は、

「確実に有効な治療薬が見つかっておらず、感染者の半数が亡くなっている状況を考えると、エボラ熱が恐ろしい病気であるのは間違いありません。しかし、空気感染しないこともあり、必要以上に怖がることはないと思います。エボラ感染が確認されている地域、とりわけアフリカの4カ国には極力渡航しない。これが一番大切です」

他には、

「体力をつける、しっかりと睡眠を取る。エボラ熱に特別効果のある対策は見つかっていないので、どんな感染症と闘うにも有効な、免疫力を高めておくことが大事」（長崎大学熱帯医学研究所の山本太郎教授）

「仮に日本でも流行の兆しが見られたら、念のため多くの人の集まるところには行かず、公衆トイレは使わないようにする」（免疫学者である東京理科大学の安部良教授）

また万が一、感染してしまった場合は、10月24日に退院した米国の看護師、ニナ・ファムさん（前ページ写真参照）の例が、参考になるかもしれない。

「彼女が治癒した理由は定かではありませんが、既にエボラ熱から回復した別の感染者からの、抗体を含む輸血が効いた、あるいは早期の治療のおかげだと言われています」（前出記者）

東海大学健康科学部元教授の田爪正氣氏が続ける。

「エボラウイルスは体内で増殖し、内臓からの出血を引き起こすことで死をもたらす。早い段階で治療を受ければ、それだけ出血を抑えられる可能性は高まると言えるでしょう」

ならば、少しでも体調に異変を感じた際は、いち早く病院に駆け込むことで、その分、「死に至る」確率を下げられると言えそうだ。

早速、10月27日午後、西アフリカに滞在していた40代男性が羽田空港で発熱を訴えたが……。

過剰に恐れず、同時に過度に侮（あなど）らず。原発事故から日本人が学んだはずの「正しく怖がる」姿勢が、今再び求められている。